

# 国文学研究資料館報

第40号

平成5年3月

## 国文学研究資料館創立二十周年

国文学研究資料館は平成四年、創立二十周年を迎え、これを記念する諸行事が、昨秋おこなわれた。

十一月六日には記念式典が、長谷川善一文部省学術国際局長をはじめとする、来賓、関係者二四一名の出席のもとに挙行された。翌七日には、当館の一般公開がおこなわれ、曇天にもかかわらず二一四名の来館者があり、展示パネルやコンピュータの画面に見入る姿がみられた。十一月二日から十四日にかけては特別展示がおこなわれ、当館所蔵の貴重書などが展示され、同十二日から十四日の三日間は国際日本文学研究集會が開催された。

### 記念式典式辞

国文学研究資料館創立二十周年記念式典にあたり、御挨拶を申し上げます。

当館は、設立の際に、また以後今日までの二十間に、さまざまな面で多くの方の御尽力を賜って参りました。これらの方々をお迎えして、本日から式を催すこ

とができますのは、私どものこよなき喜びでございます。御多用のところ御列席いただきましたこと、あつく御礼申し上げます。

昭和四十七年五月に設立された当館の第一の目的は、江戸時代の未までの国文学に関する文献を調査・研究し、それらをマイクロフィルムなどによって収集・整理して長く保存することにあります。公

|   |                           |   |
|---|---------------------------|---|
| 一 | 国文学研究資料館創立二十周年            | 1 |
| 二 | 国際日本文学研究集會                | 5 |
| 三 | 共同研究報告                    | 6 |
| 四 | 松野陽一・山崎誠・深沢眞二<br>鈴木淳・武井協三 | 8 |
| 五 | 新収資料紹介⑤                   | 9 |
| 六 | 新収和古書抄 平成四年               | 9 |

私の所蔵者各位の御理解、また多くの文献資料調査員その他の方々の御協力によって、現在、調査は約十九万点、収集点数は約十一万点に達しました。これらのフィルムは、その原ネガを館外に別置しており、逐次追加しつつ、永久保存の道を講じております。

昭和五十二年六月、現在の建物 completedして開館いたしました後は、資料所蔵者の御諒承の得られましたものを、ポジフィルムまた紙焼写真によって、ひろく研究者一般の閲覧に供し、また複写の求めに応じております。資料の増えるに従って研究上の利便はいちじるしく、多くの研究者に利用されて研究の進展に寄与してきております。

次に研究文献の収集・整理・保存・閲覧も私どもの仕事であります。雑誌・紀要の類に発表される論文や単行本などの研究情報を一年単位で整理・編集し、毎年『国文学年鑑』として刊行してござい

|    |                   |    |
|----|-------------------|----|
| 七  | 国文学データベース研究集會について | 10 |
| 八  | 文庫紹介⑤「八重山博物館」     | 10 |
| 九  | 衆報                | 11 |
| 十  | 国文学研究資料館 案内図      | 12 |
| 十一 | 利用者へのお知らせ         | 13 |
| 十二 | 平成五年度春季学会開催一覧     | 14 |



〈記念式典〉

す。もとより、これら雑誌・紀要類の収集にも努め、公私の機関の御協力を得て、現在では「年鑑」に採録した論文の掲載誌のほとんど全部を所蔵し、閲覧や複写サービスによって多くの人々の研究に資しております。

これらの業務に関して、コンピュータを活用しております。マイクロ資料目録や館蔵の和古書目録の編集に利用するとともに、これらをデータベースとして、オンライン検索サービスも行っております。

また「年鑑」所収の論文目録をデータベース化したのオンラインサービスも、本年四月より開始いたしました。これはまだ収録点数が少ないのでありますが、毎年その範囲を拡大して、より有用なものにして参る所存であります。

国文学に限らず、わが国の古典籍全部の総合目録として岩波書店刊行の「国書総目録」がございませう。当館ではそのあとを継ぐ形のものを目指し、約十年以前より編集作業を開始いたしました。「国書総目録」完成後に、各図書館・文庫等で刊行された目録はかなりの数にのほります。それらを収集し、所収の書目をコンピュータに

入力してデータベースを作成しておりますが、その蓄積をもとに、印刷体として、平成二年の初めに「古典籍総合目録」(三巻)を岩波書店より刊行いたしました。もとより、データは毎年追加されておりますので、他日その続編を刊行することになるかと存じますが、一方、印刷体だけではなく、データベースとしてオンライン検索に供することも、やがて実現させる予定であります。

さらに巾広くコンピュータを国文学研究に利用することも考えております。これは容易なことではないのですが、情報処理学者との協力により、「連歌資料のコンピュータ処理」という共同研究によってそのデータベースを作ったのが一例であります。毎年「国文学とコンピュータ シンポジウム」を開催しており、種々な面でその道を探っているところでございます。これらの事業とともに、公募による共同研究も実施し、また公開講演会や所蔵資料の展示を定期的に行つて、国文学研究の成果を広く紹介することにも努めて参りました。

当館の海外との関連について一

言いたします。当館では開館当初より毎年「国際日本文学研究集会」を開催し、海外の日本文学研究者との交流をはかつており、今年が第十六回となります。また、毎年一名の外国人研究員を迎えて共同研究を行っておりますし、国際交流基金や日本学術振興会などのフェローも受け入れております。海外に伝存する国文学文献資料の調査は、約十年前より毎年海外科研の交付を受けて実施し、成果を挙げたきており、収集も着々と進めております。

昭和二十四年に文部省史料館として設置され、国文学研究資料館の設立に際してその内部に組み入れられた史料館は、近世の文書・記録類を中心に約五十万点の史料を所蔵しております。これらを整理して研究者の閲覧に供しておりますが、逐次、所蔵史料目録を刊行するとともに、所蔵重要資料を「史料館叢書」として翻刻刊行しております。また、全国各地に存する近世史料の所在調査、各機関で編集したそれらの目録の収集も行つており、その集成である、「目録の目録」ともいふべき「近世・近代史料目録総覧」を本年四

月に三省堂より刊行いたしました。また、昭和二十七年設立当初より「近世史料取扱講習会」を毎年開催して、この方面の知識・技能の啓発普及にも尽くして参りましたが、昭和六十三年度よりこれを拡大して、「史料管理学研修会」と改称し、長期研修・短期研修の二つのコースを実施するようになりました。

なお、史料館は昨年四十周年を迎え、「史料館の歩み四十年」という冊子を刊行いたしました。

以上、当館設立後二十年のあらましを申し述べました。この間、有志の方々より貴重な資料の寄贈・寄託も受けております。寄贈者・寄託者の意を体し、保存に万全を期するとともに、広く一般の研究者の利用に供してゆく存念でございます。

最後に、この長く続けてゆくべき事業の遂行に対し、今後とも変わらぬ御指導・お力添えを賜りますようお願い申し上げます、御挨拶といたします。

平成四年十一月六日

国文学研究資料館長

小山 弘志

## 記念式典祝辞

本日、ここに国文学研究資料館創立二十周年記念式典が挙行されるに当たり、一言お祝いの言葉を申し述べます。

申すまでもなく、国文学の古典は、わが国文化の優れた所産であり、国民的遺産として後世に継承されるべきもので、これらの古典に関する研究は、日本文化の継承と発展のために重要かつ不可欠のものであります。

国文学の研究の基礎となる膨大な文献資料の収集・保存・利用等を総合的に行う機関の設立は国文学関係者の多年にわたる悲願でありました。

国文学研究資料館は、このような各方面の理解と総意に基づき、昭和四十七年五月、国立大学共同利用機関の一つとして創設されたのであります。

以来、二十年間、国文学研究資料館では、国文学に関する文献資料の組織的な調査研究及び収集・整理・保存と共同利用体制の確立を目指し、積極的な活動を展開され、マイクロフィルムやコンピューターの活用等にも早くから取り組むなど、国文学研究に必要な基盤整

備を図り、国文学の研究の充実発展に大きく寄与してまいりました。

この間の関係各位の並々ならぬ御尽力と各方面からの御支援に、心より敬意を表するものであります。

また、世界各国から日本文学研究者を迎え、日本文学の研究の場を提供し、海外における日本研究及び国際相互理解の促進にも大きく貢献してきたのであります。

今後、国文学研究資料館においては、未収集の国文学に関する文献資料の調査・収集、データベースの整備充実、情報提供システムの開発はもとより古典籍総合目録の作成や、アーキビストの養成事業の充実、施設移転問題等多くの重要課題を抱えております。

創立以来二十周年を迎えた国文学研究資料館が、関係各位の一層の御尽力と御協力により、これらの課題にも適切に対応し、今後、ますます充実発展を遂げ、国文学研究の進展に引き続き寄与されることを心から祈念して祝辞といたします。

平成四年十一月六日

文部大臣 鳩山 邦夫

(代読) 文部省学術国際局長

長谷川 善一

国文学研究資料館の創設二十周年の記念式典が催されるにあたり、一言お祝いのごあいさつを申し上げます。

国文学研究資料館は、国文学研究関係者の熱い期待のなか昭和四十七年五月、国立大学共同利用機関の一つとして創設され、爾来、国文学に関する文献資料について調査研究を行いこれを収集・整理・保存し、広く研究者一般の利用に供して国文学研究の進展に寄与するという地道で困難な道を歩んでこられました。そしてこの二十年の間に国文学の文献資料の殿堂としてゆるぎない地位を築き上げられるに至ったことは慶賀の至りであり、まことに喜びに堪えないところであります。

資料の調査・収集には、永い年月の労苦とそれを克服する情熱が必要であります。とりわけ壱千二百年に及ぶ歴史を持つ我が国国文学の調査研究に關してはたいへんな御苦勞があつたかと思ひます。これ乗り越えてここまでに発展されましたのは市古貞次初代館長及び小山弘志現館長をはじめ館員各位の御努力、そしてこれを支える多くの関係の方々の御協力の賜

物であり、ここに改めて深く敬意を表する次第であります。

国文学研究資料館が創設以来、今日までに収集し、マイクロ保存された資料のうちには海外の大学や研究機関等海外に伝存する資料も数多く含まれているようにその活動は、国内はもとより海外にまで及んでおります。

収集した資料について昭和五十二年から閲覧を開始されるとも



〈記念祝賀パーティー〉

に研究情報の収集・整理・公開も行い、また、開館当初からコンピュータによるデータの蓄積に努められ、それに基づくデータベースの開発を進め、マイクロ資料目録及び和書目録のデータベースについてはいち早く昭和六十二年四月からオンラインによる検索サービスを開始されました。

さらに今年の四月からは、国文学論文目録のデータベースのサービスを開始されたことは私ども国立歴史民俗博物館のような後発の機関にとりまして、良いお手本ともなるものであります。

国文学研究資料館のこのような二十年に及ぶ歩みに敬意と祝意を表しますとともに、今後とも、我が国の国文学関係の文献資料の調査研究の中核機関として、また、世界各国の日本文学研究者の支援にも、その機能を遺憾なく発揮されることを心から祈念申し上げます。また、本日のお祝いの言葉といたします。

平成四年十一月六日

国立歴史民俗博物館長

土田直鎮

(代読) 同館企画調整官

石井進

二十年、という歳月は、過ぎてみればまことにさりげないものがあります。その一日一日を、この国文学研究資料館の仕事に力を竭して来られた教官・職員、その他関係者各位にとっては、おそらく、山あり、谷ありの困難な長い道のりであったことだろうと存じます。しかし、その間に、この方々が仕上げられた業務は、膨大な量のものであり、しかも高度な質のものであります。この二十年間は、ただ漫然と過ごした歳月ではなかったものであります。今日が、そのずっとしりとした重みをうけとめた二十周年記念の日であることを、心から嬉しく思い、その祝意を申し上げますと存じます。

思えば、この資料館という施設は、国文学研究に携わる者の多くが、早い頃から待望していたものであります。昭和四十七年の開設に到る道程は、坦々たる大道ではありませんでした。日本学術会議の勧告や、学術審議会の答申なども、これの設置をすすめていたことですが、また、久松潜一先生、野間光辰先生、山岸徳平先生その他多くの国文学研究者、その外これを支援する各方面の方々

の多年に互る開設を求める運動への熱心な取り組みがありました。それらが実を結んだのだと聞いております。

開設されて、館長に、まず市古氏、次に小山氏という人をえました。また、教官・職員、あるいは委員などにも、優れた人材を招くことができて、資料館としての活動が始まりました。当初は、開拓の苦心がいろいろあつたようです。私が当館と関わったのは、開設後既に何年も過ぎていましたから、その頃には、諸々の事業も軌道に乗って動いていたように思いました。その後も、次々と、新しい企画・事業が加わって、資料館は、着実に歩度をのびして今日の充実を見るに至りました。

図書や資料の公開・閲覧、紀要・年鑑・機関誌・目録その他の刊行・頒布、講演会・資料展・国際研究会などの開催、大学院生の教育、共同研究グループの結成など、いずれも研究の推進に不可欠な事業でありました。この外に、当館の特色をなしているものとして、マイクロフィルムによる文献資料の蒐集と、その蒐集した資料や研究論文等の検索を、コンピュータに



〈一般公開〉

より、オン・ラインして、遠隔地の研究者も即座に利用しうるシステムを開発・提供したことがあります。これは、資料館という組織があつて初めて可能になることでしょう。聞くところによりまして、このシステムの効率をさらに高める企画が、年度計画とし組まれているとのことです。おそらくは、この仕組みは、これからの国文学研究の道筋になるものではないかと、順調に進展してほしいものだ

と思います。

十周年記念式典で、松尾聰氏が、将来、この資料館の蒐集資料が充実すると、研究者は、曾つての研究者のように、東奔西走して、図書館・文庫・藏書家を訪れ、短時間に関覧し、調査し、書写するという苦勞をせずにするだろうと言っておられました。この予測は、この十年間に、現実のことになったようで、昨今の研究者は、資料館を頼りに、写真を利用してのことです。しかし、一方で、生の資料を見る努力をしなくなったという懸念の声も聞きました。これは、資料館が有用であるということですが、研究はいささか安易に流れることはないかという心配でしょうか。

これからの運営にも困難は多いでしょうが、今日のこの二十周年の日を一つの契機にして、地道な基礎作業を大切にして、国文学研究の未来像を目ざして、資料館の事業が、堅実に内容を充実し、益々発展することを祈念して、祝辞といたします。

平成四年十一月六日

東京大学名誉教授

阿部 秋生

### 国際日本文学研究集会

国際日本文学研究集会は第十六回集会が、十一月十二、十三、十四日に開催された。平成四年度は、当館創設二十周年にあたるためこれを記念し、海外から日本文学研究者を招待し、例年より規模を拡大した集会を開催した。

とくに「近代化の中の日本文学」をテーマとした国際シンポジウムがおこなわれ、実りの多い研究集会とすることができた。

このテーマについては、すでに国内では多くの論が出されておられ、尽くされた感があるが、アメリカ、韓国、ドイツ、フランスなど、日本近代化への影響が大きかったと思われる各国からのパネリスト、コメンテーターによって、問題に新しい視点があてられた。

フランス東洋言語文化研究所のジャン・ジャック・オリガス教授は、日本語文末の「……た。」という表現に注目され、この表現が日本文学近代化に与えた影響の大きさを指摘された。また、ジョン・ウィットティア・トリート ワシントン大学準教授は、明治の合巻「鳥追阿松海上新話」と、現代の

吉本ばななの「TUGUMI」の類似性に言及された。

鹿野政直早稲田大学教授の、日本近代思想史からの発言、亀井秀雄北海道大学教授の文体論に視点をのいた発言も、新見と示唆に富むものであった。

韓国、アメリカ、ドイツより迎えた三名のコメンテーターの発言も、問題点をよく射照するものであり、司会の平岡敏夫群馬県立女子大学長の適切なリードによって、会場からも白熱した意見が出された。

また、ヴォルフガング・シャモニー ハイデルベルク大学教授、ミコワイ・メラノヴィチ ワルシャワ大学教授による二つの公開講演も、「近代化の中の日本文学」というテーマに沿ったものとなり、シンポジウムを補完するものとなった。とくにシャモニー教授によって提起された、近世と近代の文学ジャンルの相違を地図化して示すという斬新な方法は、国内の研究者にも刺激を与えるものであった。研究発表にもテーマと関連するものが多く、とくに、劉岸偉札幌大学助教授の森鷗外論、湯沼誠二北海道教育大学教授の幸田露伴論などは、テーマに対する提言を含

み注目されるものであった。

また例年のことであるが、とくに本年のレセプションは盛況で、国内外の研究者の交流を深めることができた。席上多くの参加者から、今回の集会の成果について賛辞を聞く事ができ、成功裡に研究集会を終える事ができた。

なお、この集会の記録は「国際日本文学研究集会会議録（第十六回）」に収録される予定である。



(シンポジウム)

——共同研究報告——

近世諸藩歌集の総合的研究

—藩別学芸史研究の一環として—

松野陽一

このテーマは近世武家雅文壇の解明を目的とした基礎的な研究である。当代雅文壇は活動内容として、漢詩文、和歌和文、連歌、謡曲などを包摂しているが、人的構成の面から大勢を把握するために、は歌壇構造を明らかにすることが最も効果的と判断しての研究である。

近世和歌は中世以来の堂上の系譜を引くものと、新たに台頭した古学派（国学）の二潮流があるが、幕末まで大きな勢力を占めながら未開拓部分の多い前者の歌壇構造については次の如き特徴をもってしている。即ち、古学派の人的構成が師弟関係によって形成されるのに対して、堂上派は形式的には師弟関係で門流が形成されたものの、実態的な構造としては、（公家（宗匠）⇩江戸歌壇（幕臣と各藩江戸屋敷家臣）⇩各藩国元歌壇）という相互関係の認識が肝要である。このうち、公家・江戸歌壇の

資料的研究はある程度進捗したが、

国元歌壇については個別には例外はあるものの、総合的視点からの研究はほとんど手つかずの状態であった。

こうした観点から諸藩の和歌資料のうち歌集（複数歌人の作品を収録するもの。A各藩々内歌集、B秀歌撰、C詩歌会集など）の所在調査と収集を行なった。

調査期間も不十分なものながら、Aでは仙台伊達藩「奥海和歌集」、I予大洲加藤藩「大洲和歌集」、Cでは佐伯毛利藩「文林随筆」等の新資料が確認されたのを初め、今後の研究の展望をもつことができた。

メンバーは代表渡辺憲司（立教大学教授）、木越治（金沢大学助教授）、久保田啓一（梅光女子大学講師）、今井明（福岡女子大学助教授）、白石良夫（文部省教科書調査官）、鈴木健一（東京大学助手）、市古夏生（お茶の水女子大学助教授）、沢井耐三（愛知大学教授）、鉄野昌弘（帝塚山学院大学講師）、松野の十名であった。

中世天台仏教の地方伝播と

その受容に関する包括的研究

—文学と芸能の基盤を求めて—

山崎 誠

本研究は中世に於ける天台仏教文化の裾野を、教学・思想史・民俗信仰・神道・文芸・芸能史の各分野から、包括的に把握することを目指して組織された。特にその地方伝播の問題を中心に、天台神道・田舎天台・祭祀行事の三つの視点を共通のテーマとして、共同研究を行ないたいと考えた。

中世天台文化を学際的・総合的に解明し、相互の専門分野での繋がりを確認し、新たな研究方向を模索して行きたいという目論見である。年三回の当館に於ける共同研究には制約があり、本格的研究への模索と云うほどの位置付けで、各分野の研究状況の報告と、個別テーマによる研究発表を中心とせざるをえなかった。併し文献資料批判の方法等について、共通の問題意識や専門分野の違いによる意見の違いを見て、共同研究の成果が大いに達成されたと考える。本研究は未だ終了していないので、過去二回の研究会の発表題目

を掲げて、どのような研究発表が行なわれたかを、暫時報告しておくこととしたい。

七月二十三日

・佐藤真人 「日吉大宮縁起と山王祭」

・曾根原理 「戦国期の日光山について」

同二十四日

・三橋 正 「出家作法について」

・山崎 誠 「拾珠抄」所収戸隠紅葉阿弥陀経供養表白について」

十二月十四日

・福原敏男 「祭祀を飾るもの—一つ物の成立と伝播—」

同十五日

・松本公一 「日吉山王利生記」について—その諸本と問題点—

・佐藤弘夫 「天台思想と日蓮—天皇観をめぐって—」

雄長老の学芸

—詩・聯句・狂歌・仮名草子—

深沢眞二

雄長老こと英甫永雄は、近世初期文壇において特に多彩な面をそなえた人物であった。詩僧として、聯句・和漢聯句作者として、狂歌作者として、仮名草子中の登場人物として、彼を立体的に読み解くべく、五人の参加者がそれぞれの興味に基づいてレポートし、意見を交換した。発表順と内容は次の通り。

大谷俊太(南山大学助教授)

「雄長老狂歌百首」異本の紹介と、幽齋・通勝らとの交流という視点から十首選抜しての読解。

堀川貴司(東京大学助手)

「倒痴集」の年次的構成についてまとめ、特に梅岳侍史への艶詩を読む。

深沢眞二(当館助手)

英甫永雄出座の和漢聯句作品を整理して年譜を補う。また、王昭君をめぐる和漢聯句の表現について考察。

宮崎修多(成城大学講師)

内閣文庫蔵漢聯句集「梅花無尺蔵」より、牧庵(清原喜賢)に

おける英甫永雄参加の聯句を読む。また、聯句作法の検討。

花田富二夫(大妻女子大学助教授)

雄長老と、「醒睡笑」作者安楽庵策伝との関わり、および、仮名草子における禅僧のこと。

また、英甫永雄の文芸活動をトータルに理解するためには資料の整備も不可欠である。今回、彼の詩集「倒痴集」ならびに法語集「羽弓集」の原本を、建仁寺両足院の御協力を得て実見することができた。今後、テキストの整理と校合をふまえて、その読解につとめ、機会を得て報告したいと考えている。

近世人物叢伝資料の

基礎的研究

鈴木 淳

我国には、早くから列伝の形式を採りながら、人物の履歴より逸話の記述に重きをおいた、叢伝文学と称すべき分野が存在する。近世においても「本朝歴史」「扶桑隠逸伝」「日本古今人物史」「本朝孝子伝」「近世畸人伝」「俳家奇人談」など、数多くの人物叢伝が編まれ、その多くは出版された。これらが、いずれも中国や我国の中

世以前の高僧伝や儒林伝などの伝統を汲みながらも、対象が武将、僧侶、孝子、学者、文人、その他の広い範囲に及ぶのは、近世叢伝の特色である。また林説耕斎、元政上人、宇都宮蓮庵をはじめ、当代一流の学者、文人の編者であることが多く、当然のことながら、それらは編著者の識見に裏打ちされた人物論としての内実を備えている。

また、もとより、叢伝が碑文集や人名録と並んで、伝記資料としての価値を有し、その限りでは他の文学と密接な関わりを持つことは言うまでもない。しかし、同時に単なる補助的な伝記資料としてだけでなく、それ自体、独立した文学的価値を有するものとして、より積極的に捉え直すべきであろう。

そのため、本研究ではまず、本館のマイクロ資料目録データベースを利用して、近世叢伝資料の抽出を行い、簡略な書目リストを作成した。またその書目リストに基づき、「史氏備考」「本朝儒宗伝」「近世往生伝」「扶桑蛩雪伝」「狂歌現在奇人譚」「近世浦賀畸人伝」「当世痴人伝」「古今侠客伝」その他、おもに未刊資料を紙焼写真本

によって収集し、近世叢伝の在り方について討議した。今後は、内容の検討を推し進め、人名等の索引を作成することが要務かと思われる。

●揖斐高(代表者)・稲田篤

信・嶋中道則・鳥原泰雄・竹

下義人・玉城司・藤江峰夫・

鈴木淳

日本文学の特質

—中世文学論の研究—

武井 協 三

平成四年度当館外国人研究員(客員教授)として、ポーランドからワルシャワ大学のミコワイ・メラノヴィチ教授を迎え、標記の共同研究会を計四回開催した。

第一回のメラノヴィチ教授による問題提起をうけ、以下のテーマの発表と討議が行われた。

第二回「連歌の想像力」二条良

基から世阿弥へ」松岡心平 東

京大学助教授、第三回「幽玄の研

究史」福田秀一 国際基督教大学

教授、第四回「金春禅竹と一休宗

純」禅竹の名の由来」松岡心平

東京大学助教授、「幽玄につい

て」周辺からのアプローチ」森安達也 東京大学教授。

新収資料紹介 ③

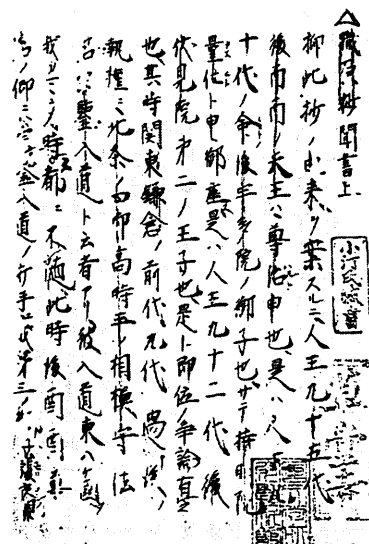
職原抄聞書

二卷二冊。整理番号ヤ一五二一、  
 二。栗皮色無地表紙に「職原抄  
 (盈・収)」と直書、内題「職原抄  
 聞書(上・下)」。縦二〇×横七三  
 cm。楮紙。本文一面十一行の写本  
 である。上巻冒頭に「職原抄聞書  
 上」として序文を兼ねた解題文か  
 ら始まる。上(盈)巻全一五四丁、  
 下(収)巻全一〇四丁。遊紙なし。  
 漢字片仮名混じり文、書き込み、  
 朱有り。虫損が多いが補修は加え  
 られており、内閣文庫蔵羅山写本  
 や、同蔵「職原聞書抄」等により、  
 部分的に虫損部を推定可能である。  
 蔵書印は本館印の他、「草堂寺」  
 (和歌山県白浜町富田、古くは真  
 言宗で円光寺と称す)、「小汀氏蔵  
 書」(小汀利得)がある。

東で広く行われたもので、本書序  
 文にもその二流の口伝に関して  
 「松月(招月庵正徹)の弟子主典  
 三位(または新田長治)から富田  
 殿に伝授された富田流と、上野安  
 部殿(安保氏泰、部)は「保」  
 の音通表記)が、宗祇を介して二  
 条殿から講説を受けた安部(保)  
 流」があるとの一文がある。  
 他注本の説を総合するに、関東  
 における職原抄講説は、①二階堂  
 信濃守、②富田流、③安保流、の  
 三系統で流布したとの伝承がある。  
 二階堂信濃守説は、秘惜のあまり  
 に中絶してしまい、安保系諸本と  
 富田系諸本が関東において流布し  
 たとの伝承を有するが、両系諸本  
 とも、顕統本系を祖本とし、両説  
 とり併せた口伝、注が室町期に流  
 布していた。

本書は、そうした関東流伝の説  
 の面影を伝えるものとして貴重で、  
 安保流、富田流それぞれの点・説・  
 義等の他、多くの説を取める。例  
 えば、楊貴妃の本朝渡来説や、聖  
 徳太子の達磨寺建立説、中臣鎌足  
 が蘇我入鹿に娘を容れた説(幸若  
 「入鹿」にもあり)や藤原姓の由  
 来の玉門藤説等、他注本に見えな  
 い説が収録され、説話的にも職原  
 抄注釈書群に於いても興味深いも  
 のが多い。  
 本書の成立時期を推測させる奥  
 書、識語等は一切ない。類書も管  
 見の限りでは見出し得なかつた。  
 但し、「親王」の条に、「或本二是  
 ヨリ已下ヲ書タルアリ、諸本二無  
 之、注力本文力不知」とあり、親  
 房五世の孫、教具所持の本文系統  
 に見える末尾部追加も行われてい  
 るが、「諸本二無之」ともあるの  
 で、一条兼良が教具所持の本を写  
 し、それが流布し始めた室町末期  
 に本書が成立した可能性もある。  
 もつとも、内閣文庫蔵の寛永八  
 年(一六三〇)林羅山写の「職原抄  
 「注」」の注に本書の一部が節略さ

れた注記が主注として使われてい  
 ることから、成立の下限をそれ以  
 前に設定できるが、おそらくは戦  
 国時代或いはそれ以前に遡るもの  
 ではなからうか。  
 なお、本書の序、或いは親房伝  
 に、後醍醐天皇の吉野還御・即位  
 を「吉野二奉レ流」と表現してい  
 る点は注目される。同様の表現は、  
 内閣文庫「職原聞書(秘)抄」、  
 静嘉堂文庫「職原口義」、書陵部  
 高松「職原抄註」等に見えるが、  
 本書の注はそれらを包含し得るも  
 ので、その伝写過程の検討には、  
 今後の精査が必要であろう。或い  
 は、本書には関東流伝の講説を集  
 成する意図もあつたのだろうか。  
 (研究情報部 相田 満)



第1丁目オモテ



### 新収和古書抄

——平成四年——

扇の草子 一冊

大本。書名の記載はない。10丁。片面に扇絵を二図上下に収め、絵に対応する和歌・狂歌を各一首、扇面の外、上部に記す。全体で、四十図、四十首。伝嵯峨本「あふきの草紙」20丁のうち10丁を覆刻したもの。江戸初期刊。

大般若波羅蜜多經 卷第三百七十八一帖 鎌倉・南北朝時代刊（永徳三年以前）。折本。料紙は黄紙、銀界五行。包帙表紙。表紙・帙共に白茶色地に金銀横縞・箔散らし。見返金銀箔散らし。扉絵あり、玄装三藏の經典将来図。卷末に「皆永徳癸亥夏六月廿八日」の墨書。但馬国大乘寺に奉納されたもの的一部。

灯庵主袖下集 写一冊

連歌学書。初丁から二十六丁までは「梵灯庵袖下集」の前半部で「夢庵」の名を記す。遊紙一丁を挟んで、残り二丁は「執筆故実之事」。見返し等に朱墨で句歌の書き込みあり。全体は同筆で、慶長五年および十六年の記事がある。

新連歌新式増抄 刊、大本一冊

寛文五年八月、長尾平兵衛開板。

上下二冊を合綴、上冊の原題簽を存す。内題「連歌新式抄」。紹巴による「連歌新式追加并新式今案等」の注釈書、慶長四年成。

弘長百首 一帖

近世前期頃の写。「入道前太政大臣」（西園寺実氏）詠のみ。「松」題を欠き、複数首を詠むべき題は一首のみを抄出する為、歌数は六十八首。「帯魚庵藏書」の印あり。

自讃歌 一帖

無表紙。奥書「文明十二庚子十一月上旬吉輔書之」。奥書を有する最古の写本（早大に南北朝写本あり。）序無し。新編国歌大観本と比較するに、作者表記・歌順等に違いが多く、寂蓮一四九番歌の替わりに異本歌一八〇番歌が存する。

類字名所和歌集 古活字版八冊

無題簽。巻首に「廿一代集部立次第」（整版）、巻末に元和三年編者昌琢の識語を付す。「古活字版之研究」の第一種本に該当するか。「加持井御文庫」「円融藏」「宝玲文庫」「拜土藏書」等の印あり。

勅撰名所和歌抄出 写二冊

後題簽（下冊のみ）「名所和歌下」。宗碩の編纂を伝える三条西実隆の永正三年奥書に続いて、「天文十五年丙午八月五日書之」とある。「雲煙家」の蔵書印あり。

文正草子

外題「ふんしやう」（題簽は朱地に金泥で笹や草花をあしらう）、縦十七・七、横二四・九。横本。袋綴三冊。表紙・紺地に金泥で桜花に水流、笹に花、あやめに水草等々の模様。鳥の子紙。本文一面十三行。濃彩。絵は三冊ともに六面づつ（中・下冊には見開き画面あり）。七十二丁。近世中後期写。絵の保存は良好。本文は流布本系として、下冊は「扱も姫君はありし硯の下なりし」からはじまる。絵は端正な筆致で、天地ともに厚めの霰を一杯にひき、金箔を一面に散らす。典型的な奈良絵本として注目されよう。

は、その落葉

服子著。写本一冊。素色古鏡文型押し表紙。二七・二×一九・四。襷。袋仮綴。四二丁。著者は、肥前佐賀本藩々主鍋島治茂の室。本書は、著者の母親で岩村藩主松平乗蒞室となり、賀茂真淵に学んだ葛子の行状。著者の兄林述斎が親

交のあった加藤千蔭に添削を乞うたもので、享和元年長月の服子の跋と、千蔭の跋を添え、巻首に千蔭宛述斎書簡四通を収める。

春のふみ

本子著。写本一冊。二四・四×一七・五。襷。袋仮綴。五丁。巻首に「春のふみ 本子上」とあり、源氏物語を手本に草した和文に朱墨の添削を加えたもの。本子自筆草稿で、添削者は賀茂季鷹か。

賀茂季鷹書簡

巻子一卷。一七〇種の長尺。末尾に「やよひ九日 季たか／本子君へ申入候」とある。本子の亡夫加藤千蔭の遺品の形見分けに対する謝礼であり、年次は千蔭が没した翌年文化六年と推定される。季鷹は本子の和歌の師。

古瓦譜

写二冊。砥粉色絹表紙。二七・二×一九・〇。襷。袋綴。一四丁、一二丁。藤貞幹輯の「古瓦譜」と福千財輯の「仏利古瓦譜」から成り、上冊に「安永丙申立秋日藤原貞幹序」を添える。印記「無仏齋」「称章館藏書記」「藤貞幹珍藏」など。「平城宮殿廢址碧料瓦」「平安古宮城廢址瓦太極殿碧料瓦」その他、古代瓦片の手拓の集録。

## 国文学データベース研究集会について

データベース室 中村康夫

国文学研究資料館のデータベース研究支援活動は、行事として二つある。一つはデータベース室主催の〈国文学データベース研究集会〉であり、もう一つは、情報処理室主催の〈国文学とコンピュータシンポジウム〉である。前者は、

国文学研究という焦点の絞られた世界で、国文学者はどういうデータベースを指すかを直接の目的にして研究集会を持っているものである。平成四年は第二回を開催した。後者は、システム研究を軸に様々な実験を重ねつつ、国語学・国文学の研究支援も視野に入れ、平成四年は第四回を開催している。どちらも、多数ご参加いただいた。

今回の館報では、〈国文学データベース研究集会〉について紹介させていただく。

過去二回分の内容は以下の通りである。

第1回  
○講演

私家集データベースをめぐる  
講師 福嶋昭治

○国文学論文目録データベース  
モンストレーション

○フリートリーキング  
第2回

○講演

個人研究のためのデータベース  
―特に歴史史料を扱うについて

講師 五島邦治

講師 両角倉一

日本古典文学作品本文データベースの諸問題

講師 安永尚志

○フリートリーキング

以上

通常の行事予定では、九月下旬から十月中旬の間に開催の予定。

昨年度の講演内容を冊子にした【国文学データベース研究集会報】が、参加案内として、九月上旬頃に各国文学研究室、図書館等に送付される。ご留意いただければありがたい。

文庫紹介⑩  
石垣市立 八重山博物館

琉球弧の南西端、八重山諸島の中心に石垣島がある。ここには本土はもちろん沖縄本島とも異なる独自の文化がはぐくまれてきた。その粋を集めたのが八重山博物館である。当館においても、最南端の調査地にあたる。一九九〇年の予備調査を経て、九一年より琉球大学の池宮正治・関根賢司両氏のご協力のもとに、那覇市の県立図書館（東恩納寛博文庫）とあわせて調査を続けている。

一般には、沖縄にも近代以前の資料があるのかと驚かれるが、土地の旧家で先祖代々、保存してきた資料が博物館に寄贈ないし寄託されたものである。目録には県教育委員会編「八重山諸島を中心とした古文書調査報告書」（八〇年）があるが、その後発見された資料もすくなくない。約四百点ほどある。とくに石垣島は他の島にくらべ、文献資料に対する意識が高いようだ。さらに司書の内原節子氏を中心とする館員の方々のご努力で、多くの資料が裏打ち補修され、表紙や帙を新装して大切に保管さ

れている。資料の保存からみても見習うべき点が多い。

具体的な資料には、近世後期以後、幕末から明治にかけての写本が中心で、漢籍も若干ある。なかでも琉球方言による「二十四孝」や「平仮名盛衰記」、「琉球狂言」、「星図」（星座・天体の名辞集）、琉球王朝をめぐる佚名の故事・歴史物語等々、一般にはほとんど知られていない貴重な資料がすくなくからずある。たった一冊だけ残された写本が琉球文化のありようを照らします。

南島文芸は近年脚光を浴びているが、どちらかといえば無文字のシャーマニックな世界が強調され、本土はもとより中国・朝鮮・東南アジア・西洋キリシタンなどの深い交渉をふまえた豊饒な文字文芸の世界が視野からはずされがちな傾向にある。琉球文学といえは「おもしろさうし」の名しかあがらぬ偏見を打破するためにも、地道な資料の保存と調査は今後ますます重要な意義をもち、やがて琉球古典文学大系に結実していくに違いない。

（文献資料部・小峯和明）

彙報

委員会日誌

平成4年

11月12日 国際日本文学研究集

会委員会(第二回)

11月17日 国文学文献資料調査

員会議(近畿地区)

12月4日 国文学文献資料調査

員会議(北海道・東

北地区)

12月10日 共同研究委員会(第

二回)

12月21日 国際日本文学研究集

会委員会(第三回)

平成5年

2月5日 共同研究委員会(第

三回)

2月12日 国文学文献資料収集

計画委員会(第二回)

2月16日 古典籍総合目録委員

会(第一回)

2月18日 情報処理システム運

用委員会(第一回)

評議員会の開催について

本年度第三回評議員会が平成五

年三月十七日(水)に開催され、

副会長に尾藤評議員が就任した。

議事は、管理運営の概況、平成五

年度予算内示及び科学研究費補助

金並びに平成五年度事業計画につ

いて評議が行われた。

運営協議員会の開催について

本年度第四回運営協議員会が平

成四年十二月十四日(月)に開催

され、議事は、教官人事について

協議が行われた。

本年度第五回運営協議員会が平

成五年三月八日(月)に開催され、

議事は、教官人事、管理運営の概

況、平成五年度予算内示及び科学

研究費補助金並びに平成五年度事

業計画について協議が行われた。

外国出張

小山 弘志

松野 陽一

岡 雅彦

新藤 協三

小峯 和明

辻本 裕成

渡航先 フランス・アイルラ

ンド

目的 在仏国文学資料の所

在に関する調査のた

め

期 間 平成5年2月24日

平成5年3月5日

松岡 憲雄

渡航先 フランス・アイルラ

ンド

目的 在仏国文学資料の所

在に関する調査事業

の事務打合せのため

期 間 平成5年2月24日

平成5年3月5日

文部省永年勤続者表彰

文部省永年勤続者表彰規程に基

づき、次の方に表彰状を伝達し、

記念品として銀杯を贈呈した。

○平成4年11月23日付

六車 正章(管理部長)

人事異動(平成4年9月)平成5

年2月)

○平成4年10月1日付

(併任)

千本 英史(文献資料部助教)

(奈良女子大学助教から)

(平成4年10月1日)平成5年3

月31日)

共同研究員(前号追加)

任 期 平成4年11月5日

平成5年3月31日

課題名 「日本文学の特質

― 中世芸術論の研究 ―

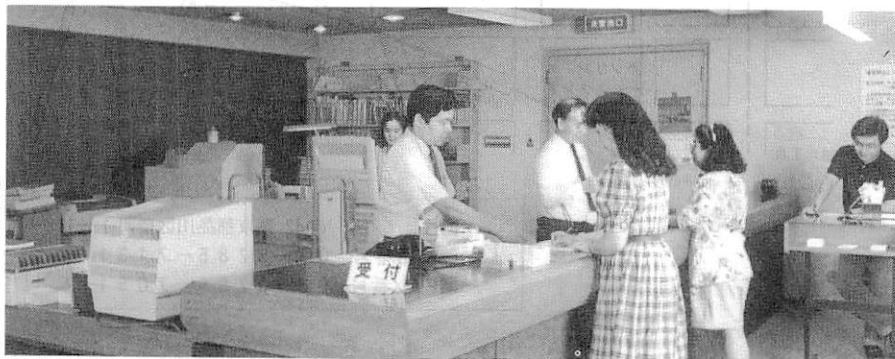
ミコワイ・メラノヴィチ

当館外国人研究員・ルシヤワ文学教授

松岡心平 東京大学教養学部助教

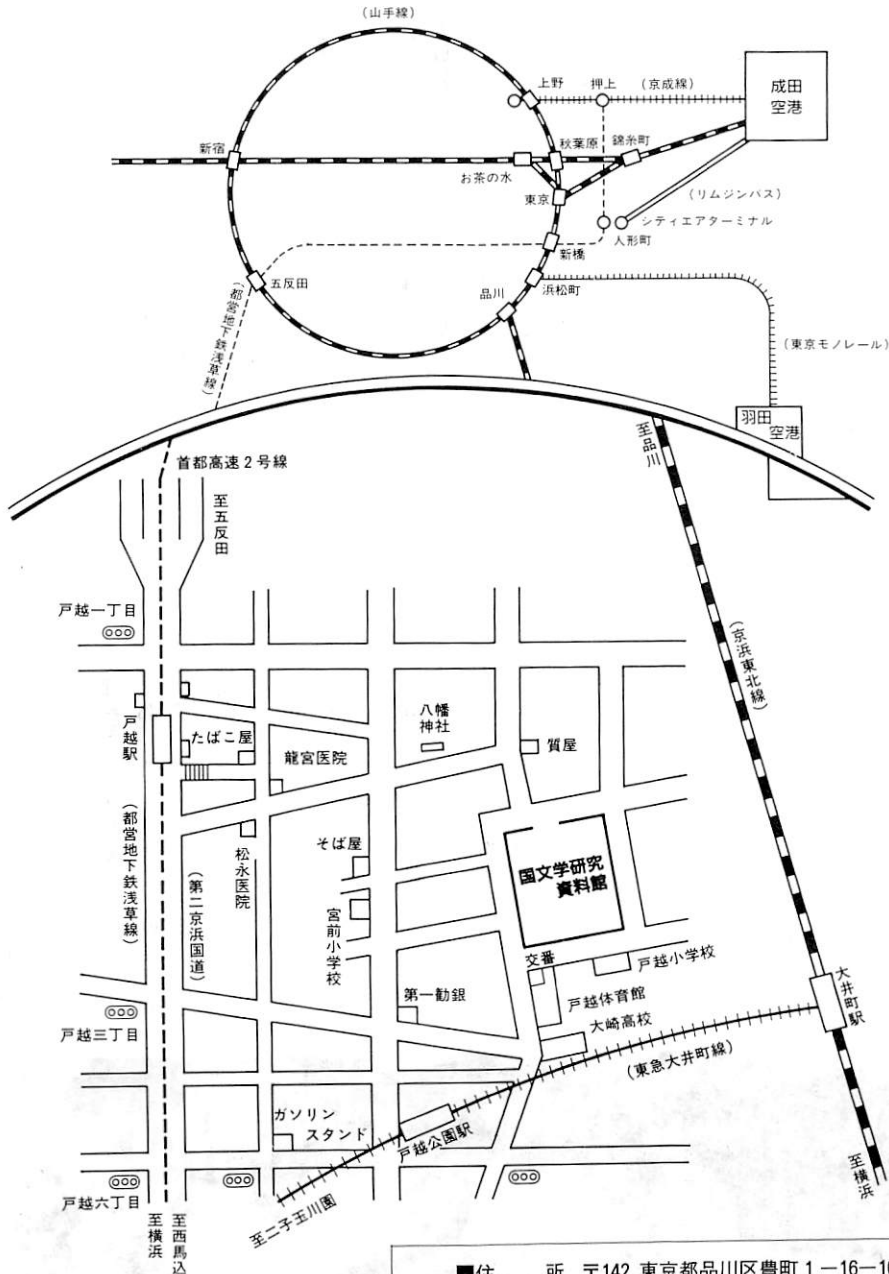
福田秀一 国際基督教大学教養学部教授

森安達也 東京大学教養学部教授



〈閲覧室カウンター〉

# 案内図



■住 所 〒142 東京都品川区豊町1-16-10  
 ■電話番号 03-3785-7131  
 ■FAX番号 03-3785-7051

## 利用者へのお知らせ

◆マイクロ資料のサービス区分変更について

このたび、武雄市教育委員会、名古屋市蓬左文庫、高岡市立中央図書館の格別のご配慮により、当館におけるマイクロ資料の複写サービスの取扱いを次のとおり変更していただきました。

(1) 武雄市教育委員会（鍋島文庫）  
名古屋市蓬左文庫

「D」（紙焼写真・電子複写の  
際事前許可が必要）から「B」（紙焼写真・電子複写の際事後報告が必要）に

(2) 高岡市立中央図書館

「C」（ポジフィルム・紙焼写真・電子複写の際事前許可が必要）から「A」（ポジフィルム・紙焼写真・電子複写の際事後報告が必要）に

◆所蔵目録刊行のご案内

このたび「マイクロ資料目録」および「和古書目録」の最新版を刊行しましたのでご案内いたします。

(1) 「国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九九二年」（第16冊）

この目録には、二〇所蔵者（文庫）分、六、九一七点が収録されています。そのうち七所蔵者（文庫）が、今回新たに収録されたものです。

収録所蔵者（文庫）は、次のとおりです。（\*印は新規収録分）。

文庫No. 所蔵者

11 京都大学文学部（頼原文庫）  
宮内庁書陵部

26 酒田市立光丘図書館

34 神宮文庫

48 名古屋市蓬左文庫

73 今治市河野美術館

255 新城市教育委員会（牧野文庫）

258 臼杵市立臼杵図書館

271 多和文庫

281 盛岡市中央公民館

283 立命館大学図書館（西園寺文庫）

298 \*茨城県立歴史館

299 中京大学図書館

304 \*福井市立図書館（松平文庫）

312 \*正教蔵文庫

316 \*蘆庵文庫

318 \*夢庵文庫

31 \*後藤重郎

31 \*後藤重郎

h3 \*抱谷文庫

ya8 矢口米三（矢口丹波記念文庫）

庫

(2) 「国文学研究資料館蔵和古書目録増加5（一九九二）」

この目録は、増加目録としては五冊目のもので、「増加4（一九八七）」刊行以降、整理を終了した三六七点の和古書（写本・版本）を収録しています。

したがって、当館で所蔵している和古書を冊子体目録で検索する場合は、「国文学研究資料館蔵和古書目録一九七二—一九八六」、「同増加4（一九八七）」、「同増加5（一九九二）」の三冊をあわせてご覧ください。

◆オンライン利用者目録（OPAC）開始について

当館では今まで、明治以降の活字本および影印本の検索については、カード目録を作成してきましたが、このたび、昨年一月以降受け入れた資料についてカード目録を廃止し、簡単な端末操作で検索できるオンライン利用者目録（OPAC）に移行することになりました。

した。

したがって、明治以降出版の図書を検索する場合には、カード目録とあわせてOPACもご利用ください。なお、OPACのデータを印字した増加図書リストも作成しています。

OPACの利用時間は開室日の九時三十分から十六時三十分まで、毎月第一木曜日（休室日の場合は翌開室日）の午後はデータ更新のため休止いたします。

◆田安德川家資料の利用について  
平成三年四月に受託した標記資料は同年十一月から閲覧に供しています。

内容は①田安宗武著作物類 ②田安家日誌 ③日記・記録類・年中行事 ④有職故実 ⑤音楽関係 ⑥国文学 ⑦犬追物・馬術・弓術 ⑧書道 ⑨猿楽 等の四千九十二冊、四十三軸からなっています。閲覧を希望される方は、カウンターに備えてある「田安德川家寄託資料目録（仮）」で検索し、「特別置資料・寄託資料閲覧許可願」（要押印）を提出してください。

## 平成5年度春季学会

①事務局 ②学会開催日 ③会場

解釈学会 ①〒101千代田区神田神保町2-46 教育出版センター内03-3239-5438 ②8月5日 ③鳥根女子短期大学  
 歌舞伎学会 ①〒169新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学演劇博物館内03-3203-4141内71-5218 ②5月16日 ③ラフォーレ原宿  
 訓点語学会 ①〒192-03八王子市東中野742-1 中央大学文学部国文学研究室内0426-74-3789 ②5月1日 ③京大会館  
 芸能史研究会 ①〒606京都市左京区浄土寺真如町77紫雲荘6号室075-781-8718 ②6月6日 ③京都御車会館  
 計量国語学会 ①〒167杉並区善福寺2丁目 東京女子大学3号館118号室03-3395-1211内339  
 国語学会 ①〒113文京区本郷7-3-1 東京大学文学部国語研究室内03-3812-2111 ②5月22・23日 ③京都女子大学  
 上代文学会 ①〒102千代田区紀尾井町7-1 上智大学国文学研究室内03-3238-3637 ②5月15日～17日  
 近畿大学  
 昭和文学会 ①〒101千代田区猿楽町2-2-5 笠間書院内03-3295-1331 ②6月5日 ③國學院大学  
 説話・伝承学会 ①〒602京都市上京区今出川通烏丸東入 同志社大学国文学研究室内075-251-3421 ②4月28・29日 ③同志社大学  
 説話文学会 ①〒168杉並区水福1-9-1 明治大学和泉校舎法学部林雅彦研究室内03-5300-1298 ②6月26・27日 ③明治大学 深川江戸資料館小劇場  
 全国大学国語教育学会 ①〒673-

14兵庫県加東郡社町下久米942-1 兵庫教育大学言語系教育研究室内0795-44-1101(4月1日より移転予定) ②8月5・6日 ③東京茗溪会館  
 全国大学国語国文学会 ①〒101千代田区猿楽町2-2-6 桜楓社気付03-3294-0857 ②6月12・13日 ③明海大学  
 中古文学会 ①〒102千代田区三番町6 二松学舎大学文学部国文学科研究室内03-3261-7406内260 ②5月22、23日 ③二松学舎大学  
 中世文学会 ①〒192-03八王子市東中野742-1中央大学文学部国文学研究室内0426-74-3789 ②6月12～14日 ③青山学院大学  
 日本演劇学会 ①〒169新宿区西早稲田1-6-1早稲田大学演劇博物館内03-3203-4141内71-5218 ②5月29、30日 ③早稲田大学  
 日本音声学会 ①〒110台東区東上野3-25-6蒼洋社ビル5F03-3839-3957 ②6月19日 ③未定  
 日本歌謡学会 ①〒630奈良市高畑町 奈良教育大学真鍋研究室0742-27-9153 6月5、6日 ③杉野女子大学  
 日本近世文学会 ①〒171豊島区目白1-5-1 学習院大学日本語日本文学科諏訪春雄研究室内03-3986-0221内5766 ②6月5、6日 ③慶応大学  
 日本近代文学会 ①〒156世田谷区桜上水3-25-40 日本大学文理学部国文学研究室内03-3329-1151 事務取扱①〒113文京区本駒込5-16-9 学会センタービル日本学会事務センター内03-5814-5810 ②5月22、23日 ③学習院大学  
 日本口承文芸学会 ①〒112文京区白山5-28-20 東洋大学東洋学研究所内03-3945-7483(4月1日より移転の予定) ②6月5・6日 ③東京都立大学  
 日本国語教育学会 ①〒112文京区大塚3-29-1 日本教育研究連合会第3研究室内03-3941-3420 ②6月13日 ③奈良教育大学  
 社団法人 日本語教育学会 ①〒107港区赤坂1-8-10第9興和ビル内03-3584-4872～3 ②5月29・30日  
 ③国際基督教大学  
 日本児童文学学会 ①〒182調布市

緑ヶ丘1-25 百合女子大学児童文化研究室気付03-3326-6910  
 日本社会文学会 ①〒102千代田区富士見2-17-1 法政大学文学部西田勝研究室内03-3264-9751 ②7月3・4日 ③川崎市  
 日本比較文学会 ①〒573枚方市北片鉾町16-1 関西外国語大学阪上善政研究室内0720-56-1721 ②6月19・20日 ③立正大学  
 日本文学協会 ①〒170豊島区南大塚2-17-10 03-3941-2740 ②7月4日 ③名古屋大学  
 日本文学風土学会 ①〒214川崎市多摩区東三田2-1-1 専修大学文学部国文学科内044-911-1036 ②6月12-13日 ③専修大学  
 日本文芸研究会 ①〒980仙台市青葉区川内 東北大学文学部国文学研究室内022-222-1800内2503 ②6月12-13日 ③東北大学  
 日本文体論学会 ①〒110台東区下谷1-5-34三修社内03-3842-1711 ②6月25・26日 ③聖徳大学  
 日本方言研究会 ①〒115北区西ヶ丘3-9-14 国立国語研究所気付日本方言研究会幹事03-3900-3111  
 ①〒192-03八王子市南大沢1-1 東京都立大学国語研究室内 日本方言研究会幹事0426-77-2135 ②5月21日 ③立命館大学  
 俳文学会 ①〒663西宮市戸崎町1-13 武庫川女子大学第三学舎島津忠夫研究室内0798-67-0079  
 表現学会 ①〒730広島市中区東千田町1-1-89 広島大学総合科学部日本語学研究室内082-241-1221(4月1日より移転予定) ②6月5・6日 ③鳥根県立女子短期大学  
 萬葉学会 ①〒558大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学文学部国語国文学研究室内06-605-2413～4  
 紫式部学会 ①〒230横浜市鶴見区鶴見2-1-3 鶴見大学文学部日本文学科研究室内045-581-1001内242  
 和歌文学会 ①〒102千代田区三番町12 大妻女子大学国文学研究室内03-5275-6028  
 和漢比較文学会 ①〒468名古屋市天白区高宮町1302 名古屋女子大学日本文学科野崎研究室内052-801-1133

国文学研究資料館報 第四十号  
 平成五年三月発行  
 編集・発行者  
 国文学研究資料館  
 東京都品川区豊町一六一〇  
 郵便番号一四二  
 電話(三七八五)七一一(代)  
 印刷所 陸美マイクロ株式会社